はない」、「カノンボール」、最近では「シュアシング」、「レインマン」、「パリ、テキサス」（アメリカ映画ではないが）等枚挙にいとまがない。

日本映画のロード・ムービの代表格は「男はつらいよ」シリーズである。主人公の寅次郎は、一応葛飾柴又に叔父の家があるが、一年の大半は北は北海道から南は沖縄まで旅をしている、まさに「渡世人」である。

こうした映画が古今東西で幅広い支持を受けている根拠には、人間が持っている、本能としての動欲求、心の深層にある移動欲を刺激するためではないか。考えてみれば、本来人類は定住はしていなかった。遊牧民のように、食物や獲物を求めて絶えず移動していたのである。むしろ、定着した農民が特殊で、大半は遊牧民や漁民であったと考えると、人間は本来「ホモ・モーベンス（動民）」（黒川、1969）なのかもしれない。仮に定住していたとしても、心の奥底には移動への憧れがあるのかもしれない。大袈裟に表現すると、ユンクの指摘する集合的無意識が全人類に共通する原型として存在するのかもしれない。

巡礼の発生を次のように捉えている研究者もいる（山折、1991）。

「まず食物摂取のための移動があり、そのプロセスで特定の場所に特定の象徴や意味を見出していくという精神的なルートがあらわれ、それらが重複しながら、しだいにカミの巡礼に分化してくるということでしょう。」（p. 11）

Ⅱ　巡礼行動の過程

筆者は、1998年6月16日からおよそ二週間、レオンからサンチャゴ・デ・コンポステラまでの300kmを徒歩で歩いてみた。その巡礼経験から巡礼行動の過程は、次のような六つの段階に分けられるのではないだろうか。自己内省による試論である。

1　精神的不安期、孤独期

果たして目的地まで到達できるのかという不安が一番大きい。また巡礼道に関する情報不足に関する不安もある。具体的な不安を挙げると、「途中で病気にはならないだろうか？」「道に迷わないだろうか？」「犬にかまれないだろうか？」「強盗に襲われないだろうか？」他人は笑うかもしれないが、筆者はヘビが嫌いなので、巡礼中ヘビに出会わないだろうかということが特に心配だった。スペインのマドリッドのピソの大家さんが、ガンソーという巡礼路の村の出身で、彼女に尋ねたところ一笑にふされた。しかしコンプルテンス大学の教授が若い頃歩いたらしいが、その時一匹見たというので、やはり心配だった。幸いにもヘビには出会わなかった。

「この巡礼を始めたばかりの頃は、自分は歩き通せないのではないかと、いつも恐れていた。ロンセスバイエスを通り過ぎた頃には、この旅のあらゆることについて、非常に幻滅していた。」（コエーリョ,1987 p. 129）

道に迷うことについては、それほど心配する必要はない。いたる所にある黄色い矢印に沿って、そしてサンチャゴまでの距離を示す、貝殻の石碑を便りに歩いていけばよい。出発前に、三十万分の一のガリシア地方の地図を購入したが、巡礼中に参考にすることはほとんどなかった。しかし、宿舎で次の日に歩く距離や行程を決めるといった、計画立案には地図は不可欠なように思われる。

2　身体疲労期

極端な場合には病気になって一日あるいは二日寝込む。筋肉痛、肩凝り、足の豆、幸い筆者は病気にならなかったが、風邪をひいて寝込んだという巡礼者もいた。足の豆もできなかったが、おそらくこの理由として、私は事前にトレーニングをしていたからだろう。だがバンドエイドは必需品。筆者は普通の運動靴で歩いたが、これは失敗だった。靴下を二枚はいて膝へのクッションを和らげたり、靴擦れを防ぐ効果はあったのではないか。でもトレッキングシューズを履くべき。ほとんどの巡礼者がそうである。なぜなら、たいていの巡礼路は岩や石ころがゴロゴロしている山道が多く、踵を固定した深めのブーツでないと、足首をひねる可能性がある。筆者も途中で犬が吠えるのに気をとられ、道への注意が散漫になった時に、軽く足を捻った。幸い大事には到らず、軽い痛みのまま、歩き続けることができ、自然に治癒したが、靴には細心の注意を払うべきである。

ラバナ・デル・カミノ（Rabana del Camino）